

# サステナビリティのためのマネジメント

小松 幸夫

早稲田大学創造理工学部建築学科 教授

## 環境問題への関心の高まり

環境問題への関心が高まっている。一口に環境問題といってもその内容は複雑で多岐にわたる。資源枯渇、ゴミ処理、温暖化ガス排出抑制、生態系保護等々であるが、これらの関連を理解することはなかなか容易でない。しかしながら、これらの問題が我々と我々の子孫の生活に大きく影響してくるであろうことは、多くの人が感じているのではないか。今もっとも身近な問題は省エネルギーである。「クールビズ」もかなりなじみのある言葉になったが、服装を軽快にして冷房を節約するという一見簡単なことでも、自発的にはなかなか実行できないのが現実である。

## サステナビリティのためのマネジメント

深刻化する環境問題に対応して、サステナビリティという言葉がよく使われる。これは「持続可能性」と訳されるが、代表的な定義は「将来世代のニーズの充足可能性を損なうことなく、現代世代のニーズを満たす発展」とされている。格別の我慢をしないで環境への影響を減らそうということであるから、今までのやり方を根本から変えていくことも必要になる。さて建築の世界はというと、もっぱら長寿命化が叫ばれている。建物を建てる、あるいは壊して処分するには大きなエネルギーが必要となる。だから新築から解体までの時間を長くすることにより、環境への影響を減らしていこうという論理である。この背景には、戦後の日本社会が建物のスクラップアンドビルドを繰り返してきたという反省もあるように思われる。しかしながら、長寿命化という言葉をただお題目のように唱えているだけではどうにもならない。どうやって長寿命の建物を造るのか、またすでにある膨大なストックをどうしていくのかなどを具体的に考えていかなくてはならない。そこで必要となるのがマネジメントである。

## 長寿命化の実現へ向けて

マネジメントという言葉は日本語には置き換えにくい。筆者は「工夫を重ねてなんとかする」という意味で「やり繰り」をあてるのがよいと思っているが、いかがであろうか。個々の建物を長く使うように考えることは確かに大事であるが、だからといって全ての建物を長く使うべきだということにはならない。存続させると効率が悪い建物であれば、敢えて建て替えるという判断も必要である。都市の中でたくさんの建物をどうやり繰りしていくか、残すべきものと壊すべきものを正しく峻別していくことが求められるが、これを行うのもマネジメントの一部であろう。個々の建物を運用するというレベルにおいても、単に現状を維持していくというだけでなく、設備の更新や付加をどうするか、建物の性能向上をどう実現するかという判断の積み重ね、すなわちライフサイクルマネジメントが長寿命の実現につながっていく。ただしそうした判断を正しく下せるようになるためには、マネジメントを担う組織の整備や、判断の基礎となる十分な情報の蓄積が不可欠である。環境のサステナビリティをマネジメントしていくには、まずそれを可能とする環境を整えることが第一歩である。

## プロフィール



小松幸夫(こまつゆきお)  
早稲田大学創造理工学部建築学科  
教授

1949年東京生まれの関西育ち。  
東京大学工学部建築学科卒業後、同  
工学系研究科建築学専攻博士課程  
修了、工学博士。  
東京大学助手、新潟大学助教授、横  
浜国立大学助教授を経て現職。  
専門は建築構法計画であるが、現在  
は建築経済関連の建築と一般社会  
の境界部分にかかわる仕事も多い。